令和　　７年度　　園評価書

園番号　26　園名　広野こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価		改善策（来年度の具体的な取組目標等）
笑顔あふれる元気な子	友だちとつながるって　おもしろい	ワクワクするものに出会いそれを楽しむ中で、自分なりに考えたり試したり工夫したりしながら遊びの展開を楽しんでいる	園庭にビオトープや雑草エリアなどを設け、環境を作ることで身の回りの自然物(砂、水、草花等)に目を向ける子ども達の姿が増えた。草花から色水を作り、凍らせたらどうなるかを実験したり、その氷でかき氷屋さんをしたりと、自分達の遊びがより楽しくなるように試行錯誤しながら遊ぶ姿があった。今後も、出会ったモノ、コトに対して、想像力や創造力を働かせながら、心を動かす経験を増やし、興味があることをとことん追求して遊ぶ姿につなげていきたい	A	A	・子どもたちが自己表現しながら可動道具を取り入れ、心を開放しながら遊んでいると思う ・保育者も子どもたちも日々楽しそうにしている ・小学校で異学年の関わりが自然とできるのは、園で培われた力ではないかと思っている	・今年度同様、『子どもの遊びを止めない』ことを念頭に「何でもやれる」という思いのもと、子どもがさまざまなことにチャレンジし、想像力を働かせてじっくり遊べるよう、保育者が遊びの先を予測しながら、環境構成をしていく ・異年齢児の交流を、自然な形で１年を通して行っていくことで、年下の子への理解が深まり、思いややりたいわりの気ちちなどが育まれるようにしていく ・少人数で関係が固定的になりがちなので、友だちと意見をぶつけ合うことや葛藤する経験をチャンスと捉えて、あえて直後の介入を避け、なるべく職員全員で見守るようにしていく ・心ゆくまで遊ぶ中で、「なぜ？」「どうして？」「もっと知りたいな」など発見や気づき、感動など、心が動く経験を重ねることで、自分なりに考えたり工夫したり発想したりする力が身につき、それをさまざま形で表現できるよう保育者が子どもの思いを汲んだ声かけをしながら、環境を用意していく
		友だちと一緒にいることや一緒に遊ぶことを楽しむ中で、友だちとやり取りするおもしろさを体現している	乳児では、友だちの顔を見てみんなで笑い合ったり、同じ場で遊んだりする等、友だちがそばにいることを楽しんでいた。年少では、かくれんぼで友だちが隠れている所に一緒に隠れ、楽しさを共有する姿があり、年長になると、大人数で遊ぶ楽しさにも気付き、友だちと誘い合って、ドッチボールを楽しむ姿も見られた。友だち同士でやりとりをしながら、自分達でルールを決めるなどして遊びをより面白くしようとしていた。園庭遊びの中で、異年齢児と関わり刺激を受け合って遊んでいるが、年下の子に対しても対等にかかわろうとする姿がある。異年齢での活動を増やしていくことで、違う年齢の子への理解や思いやりの気持ちを育んでいきたい。また、少人数ならではの良さをもっと感じられるようにしたい。	A	A		
		自分なりの表現で思いを伝えたり、相手の話を聞こうとしたりする姿がある	自分の思いを言葉や服装、表情など、様々な方法で表現していた。乳児では、保育者や友だちの顔を覗き込んだり、泣いている子の頭をなでたりする姿があった。幼児では、友だちと一緒に遊ぶことを楽しむ中で、相手の話を聞こうとしたり、意見が異なる時に「じゃあ、こうしよう」と提案したりする姿が見られた。年長では、友だちの思いを汲んで、行動しようとする力も育ってきている。「〇〇ちゃんが～だって」と自分や友だちの状況を保育者に伝えることはできるが、だからどうしたいのか、どうすればいいと思うのか等を自分なりに考えて伝えることが苦手な子が多いので、まずは自分で考える力を育みたい	A	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価		改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達の道筋を理解し、個人差や個々の興味・関心に配慮した対応や環境が用意されている	月案や週案など子どもの姿に合わせた保育計画、環境構成を行い、実施した。学年ごとの公開保育でも職員間でねらいや願い、育ちなどを共有し、特に担任間では個々の姿を考慮しながら連携して保育にあたるようにした	A	A	・園だよりなど保護者に配信したり、見てくれない保護者への発信も必要 ・自然を感じ、取り入れて遊んでいるのが良い。自然を取り入れることができる園庭、遊べる人数も良い ・車いすの子に対して、子どもたちが困っていたら「みんなが助ける」「玩具を渡す」と答えたことで、クラスの中に自分とは違う子がいることで、どうしたら良いのかの経験値になっている ・毎年変わる職員の中で、取り組みはじめるのも時間がかかる。終わりがないからBなのか、もっとできると考えての課題なのか。自分たちでAだと思う気持ちがあるならそれも大事にして欲しい ・保育者の接し方が「危ないよ」から「やってみたら？」に変化し、自由度があがった ・働き方改革もあり、どこまでやるかは保育者によっても違うのは当然だが、全体的にあがってきていると感じる ・職員の思いがB評価なので、期待を込めてBにしたい ・夏の研修で来園したり、や小学校探検など園児が小学校に来ることでも学校職員の意識が変わったができた ・地域との関わりはいいと思う ・AIに相談すると良い回答を得られる場合もある。選択肢の１つとして悩みなどをきいてみるのもいい思う	子どもの発達の道筋をしっかりと捉え、子どもの年齢や発達に合った姿を領域でおさえていく。個々の育ちや経験させたいことを職員間で共有しながら保育していく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	さまざまな家庭環境があることを理解し、子どもが集団生活の中でできるだけゆったりと、安心して過ごせるように個々に配慮している	登園時間が遅い家庭の子には、遊ぶ時間の保障をしたり、散歩の時には事前に出発時間を伝えたりと、各家庭に応じた対応を行うようにした。特に乳児にはそれぞれのクラスに配置人数より多い職員を入れ、手厚い保育ができるようにしたが、気になる子に目を向けてしまいがちで、自発的に遊びを楽しめる子への配慮が足りなかったという反省が出ている。また早番や遅番時の伝達が十分に行き届かなかったこともあったため、担任からの伝達には特に注意を払い、今まで以上に職員間の連携を取りながら、個々に合わせた関わりをしていきたい	B	B		早番から担任へ、担任から遅番への伝達は特に注意深く確実に行うように職員間の連携をとっていく。気になる子の保護者だけでなく、自発的に遊べる子の保護者にも意識して、子どもの姿を伝えるようにしていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもが自ら選択して遊びだし、探求心が育っていくよう、年齢や発達に合った素材や教材、遊具や用具、場所や時間の提供ができている	季節に合わせた素材や教材を各学年で取り入れて、職員間で共有するようにした。その都度子どもの興味や関心に合わせて保育者が必要と思われるものを用意したり、パレットやコイル等の可動道具を増やしたりして、子どもが自ら選択し遊びだす姿が増えた。後半は秋の自然物を集めたり、遠足で広野海岸に出かけ流木や貝・石などを拾って持ち帰り、今まで以上に自然を使った遊びを楽しむようになった	A	A		園庭や近隣の自然を子どもと一緒に探したり、集めたりし、欲しい物を使って自発的な遊びが展開されるようにしていく。子どもの姿や職員の意見を共有しながら、環境の再構築をしていくことで、子どもの遊びが深まるきっかけを作っていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	減災教育についての理解を深め、想定される災害時に取るべき行動を、一人一人が理解し、職員が連携して避難・誘導ができている	職員が減災教育の研修を受けたことで、防災から減災に意識が切り替わり、その時々に想定した災害時に自分が取るべき行動を考えながら避難・誘導を行うよう、意識が高まった。分掌が全ての訓練企画をたてるのではなく、企画をたてる職員を変えることで、具体的な想定を自身のこととして捉えられるようにした	A	A		減災や不審者対応についての今年度の学びをふまえ、子どもを守るために必要なことを自分で考え、判断していけるように職員一人一人が意識していく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	身の回りの健康習慣が身につくように、各年齢に合った丁寧な指導や保護者支援ができている	手洗い・うがい・身支度の習慣だけでなく、食育にも力を入れ、年間計画に基づき、毎月食育の日にはイラストやクイズなどで、食の大切さが伝わるようにした。また、市の食育のねらいに基づき、毎月『噛み噛みメニュー』の掲示をするとともに、食材を噛むことに適した大きさや固さにして提供できるよう給食室と連携をとりながら、噛むことの大切さを保護者につたえるようにした	A	A		今年度に引き続き、給食室と連携を取りながら食育に力を入れ、毎月の噛み噛みメニューの掲示や食育の日の活動を行っていく。健康習慣や身支度習慣も個々に合わせて行っていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	誰もが区別や差別なく仲間として共に育っていけるような園の雰囲気を作るため、職員が特別支援教育やインクルーシブについて学ぶ努力をしている	クローバーの会（遊びの会）に職員が順に参加できるようにしながら、ケース会議や研修報告などで特別支援の情報や知識の共有を行うようにした。また様々な背景の子どもたちが分け隔てなく過ごせるよう、普段の保育の仕方などを工夫した。ABA（応用行動分析）の研修を保育者全員が参加して行い『その子が何に困っているのか』深く読み取りながら、支援の共通認識をもつことができた。ABCシートやストラテジーシートをもっと活用できるようにしていきたい	A	A		月に１回のクローバーの会を継続して行い、担当職員以外も参加できる機会を増やしていく。またABCシートやストラテジーシートを活用することで子どもが困っていることを明確化し、支援方法を職員間で共有していく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	各自が園運営の推進役としての自覚をもち、情報を共有しながら、責任をもって分掌に取り組んでいる	パート職員も各々役割を持つことで、組織の一員としての意識をもって分掌に取り組めるようになったが、活動時間がなかなか確保できなかった。 今後は他の分掌との連携や情報共有を行いながら、時間を生み出す努力をしていきたい	B	B		クラス保育と分掌がそれぞれ関わり合い、各分掌が推進役として意見や提案を出しながら、計画的にすすめていけるように、職員配置を考えながら話し合いの時間を生み出していく。
6 研　修	(1)研修体制の充実	研修部を中心に保育研究が行われる中で、子ども同士の関わりを支えることができよう、声掛けの内容やタイミング・声のトーンなどに配慮した言葉がけをするよう努めている	公開保育、事前事後研修を各学年行い、外部講師も４回招いた。子どもの姿を肯定的に、丁寧に見取ることの意義を共通認識でき、声掛けの内容やタイミング等を、保育者一人一人が意識して保育することにつながった。また、公開保育ごとに、事前・事後研修だよりを作成し、学びの共有に努めた	A	A		今年度の学びを基盤にし、子どもたちが今よりもっと遊びを深めていけるように、各分掌が軸となり、園全体で”もっと面白いことができる”園庭環境の充実を図っていく。遊び構想図（わくわくマップ）の作成や教材研究も定期的に行い、季節のモノ・コトや地域の資源を生かした保育を行っていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	ヒヤリハットやハザードマップ、遊びだしの環境の検討を行い、安心安全かつ子どもの意欲が引き出されるような環境作りに努めている	ハザードマップの作成や掲示、ヒヤリハット提出率向上のために用紙を置く場所を変更したり、提出枚数を決めて呼びかけたりしながら、子どもたちが安心安全な環境で生活できるように努めた。幼児と乳児の「遊び出しの環境」について話し合いが不十分だったため、今後は園庭の遊びが重ならないようにコーナーや拠点を作れるよう、環境図などを用いた話し合いを再開したい	B	B		園庭環境図の共有により、遊び出しの環境の工夫をし危険がないようにしていく。ヒヤリハットの用紙を日誌に挟んだり事務室の見える場所に置いてすぐに記入できるようにすることで、提出率をあげ職員の危機意識の向上、子どもの安全面の保障をしていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	IT化の中で、保護者に見やすく伝わりやすい配信文章や内容を考え、園が大切にしていることが理解してもらえるよう努めている	毎日の遊びの様子や活動内容が伝わるような文章や写真を載せて配信するようにした。写真には映っていない子がいないように、各クラスで定期的なチェックも行った。クラス便りでは、保育の意図や子どもの育ちが伝わるように意識し、特に伝えたいことはドキュメンテーションや手紙の掲示、口頭伝達も行うようにした	A	A		デジタル化が進んでいるが、100%の保護者が見ているわけではないことを踏まえ、デジタルではないドキュメンテーションや登降園時のコミュニケーションも大切にしていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	地域の小学校やこども園とのつながりを大切にし、公開授業や公開保育、交流事業や研修を通して連携を図っている	長田５ヶ園交流を定期的に行い、学年ごとの職員研修もできた。３月に4,5歳児交流も計画している。今年度は「小学校探検」で給食の様子を見せてもらったり、クラスに入って１年生に興味持る時間を設けてもらったりすることができ、子どもたちの不安が軽減し、就学への期待が高まった。授業参観や中堅保育教諭の事後研修への参加と、小学校教員による保育参観など、昨年度より交流の場が増えた。今後は幼小の職員研修を通して連携が図れるよう努めたい	A	A		授業参観や情報交換会の他、公開保育や事後研修にも出てもらえるよう呼びかけ、小学校と職員間の連携が図れるようにしていく。小学校内への散歩や学校探検など校内に園児が入る機会を作ってもらい、つながりを深めていく。長田５ヶ園交流を継続し、子どもが小学校入学する時の不安軽減や職員間の連携にもつなげていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	散歩に出かけあいさつを交わしたり、地域の様々な行事に参加したりする中で、地域の方に大切にされ、職員や園児・保護者が地域への親しみが深まっている	散歩に出かけ地域の方と挨拶をかわしたり、農家さんに協力をいただき桃畑の継続した見学をさせてもらったり、広野海岸への遠足、広野文化展への参加やももクラブ（S型ディ）・広野病院への慰問など、子どもたちや保育者が地域を知り、地域に愛される園づくりに努めた。乳児や行事に参加しない学年に関しては関心が薄いこともあり、保護者の理解を得るのが難しいと感じる。今後はさらに園だよりやボードを通して、全学年にも伝わるような発信の仕方を考えていきたい	B	A		今後も地域の自然や行事に触れる機会を多く持つようにし、地域に親しみ愛される園づくりをしていく。地域の行事や交流では、参加していない学年の保護者にも、地域とのつながりがわかるような発信をしていく。また、地域で活躍している方々の協力をお願いしながら、人的な地域資源として保育に生かせるようにしていきたい